

會



報

1957年 5月

192

日本山岳會

ウ・エ・ツ・デ
ル・海・の・旅

木下 是雄

明後三月二十八日にワシントン東南の軍港ノーフォークに到着、ウェッデル海行きの旅を終ります。昨年十一月三日に砕氷艦スタテンアイランドに同乗してシャトルを出て以来約五カ月、航程二万哩、地球一周に近い長い船旅でした。

大体このことは新聞などでご承知かと思いますが、私の米国隊参加は来年度の日本隊のための参考資料を得ることとIGY（国際地球観測年）事業のモットーとする国際親善協力にいくらか役に立つことが任務で、米国隊の中にも処女地に基地を作ることになっているウェッデル隊を特に選んだわけでした。ウェッデル海は南米大陸の南にあたり、今度設置したエルスワース・ステーションは日本隊の昭和基地とは経度で八十度、距離では二千キロメートルほど離れています。北極の極心附近と共に世界で一番手ごわい氷の海として知られ、「The Hell Lode of the Antarctic」と呼ばれているところ

です。砕氷艦スタテン・アイランド輸送艦ワイアンドットの二隻は十二月七日に南米の南端、地球上最南の港ブントアレナスを出て、サウス・オークニーアイランズに向い、そこから風浪と氷山との中を

南緯六十度線に沿って東に航行、十七日に、西経十五度に達して針路を南に変え、浮氷帯に入りました。ウェッデル海の中央ならびに西部は浮氷のため航行不能なので、東端から侵入して大陸沿岸のオープン・ウォーター（開水路）に道を求めるのが定石です。しかしまだ時期が早いために東寄りの方も浮氷の状態が悪く、十二月二十二日には76°30'S, 115°30'Wで見渡す限りの氷原の中にとじこめられ、そのままクリスマスを迎えました。氷上には浮氷片が押合つて出来た氷塊が至るところに乱立しその上に数十糎の雪が積つています。文字通りのホワイトクリスマスでした。

太陽が低く南に廻つて澄んだ空の下にしんと冷えてく夜には水平線に倒立した氷山の蜃気楼が並びました。

二十六日ようやく浮氷がゆるんで前進しはじめ、二十八日にははじめて南極大陸の氷棚を見ました。二十米くらいの氷崖がえんえんと連なつた下に波一つ立たぬ一条の開水路があり、その上を英国のハレイ湾基地、ジャックルトン基地アルゼンチンのベルグラノー基地と次々にヘリコプターで訪問しながら順調に西進しましたが三十一日に至つてガウルド湾の沖77°40'S, 54°30'Wでまた浮氷にとじこめられ、今度は十日以上動かせませんでした。シャックルトンが乗船エンデュランスを凍結させられたところのすぐそばです。北風が浮氷を大陸に押しつけ、氷を氷の間に釘づけし、われわれは氷塊乱立する雪原の真只中で強制された正月

休みを持ちました。船に乗つていて水を見ないのは変なものです。ヘリコプターの偵察によるとガウルド湾の西方に長さ二十七哩と三十四哩というべらぼうに大きな氷山が二つあり、これが浮氷の集積の一つの原因でした。

一月十日夜にはじめて南西の風が吹いて浮氷がゆるみ十三日までかつて上記の大氷山の裾をまき再び氷棚に沿つて西進しはじめました。ガウルド湾以西はまだ船の入つたことのない水域です。もつともこの隊はバルマー半島のつけ根から南西に伸び出たボムマン半島という小半島(74°30'S, 68°15'W)に新基地を作る予定で十五日にはその東数十哩まで接近したのですが、ヘリコプターを飛ばしてみると一九四六—四八年のローン・エクスペジションの航空写真による予想を裏切つて意外に氷壁が高くちよつと荷揚げの可能性がないことがわかりました。一方それまでの氷海での荒仕事で両舷ともスクリュウの翼を氷に喰いかかれ、ワイアンドットの方は横つ腹に二カ所も穴があいている状態だったので正月に凍結された浮氷帯を帰途につくことにも不安があり、結局涙をのんで引返してもつと東寄りに基地候補地を探すことにになりました。艦橋から眺めてみると氷棚のはじめの氷崖にはクラミングの対象としてならいくつでも話がつくところがみつかるのですが、六千トンを越す荷上げの可能性を考えると皆駄目です。結局また例の大氷山を迂回して正月に凍結された近辺まで帰りつきました。ここでヘリコプター偵察に

よつてガウルド湾東岸に手ごるな上陸点があることを確かめ、そこに到達しようと数日にわたつて努力したのですが、浮氷に圧力がかかつていて砕氷艦が水路を開いてもすぐ閉じてほとんど動けず、一方機動部隊司令部から指令もあつて一月二十五日夜に至つて更に東進することにきまりました。その翌日77°43'S, 41°08'Wに好適な上陸点を見、ヘリコプターおよびスノーシューズをはいた徒歩隊の慎重な偵察の後ここがエルスワース・ステーションを作るべき場所と定められました。

シエルフ・エツは大てい高い急崖ですが、ここは海に望んだ三米の崖から五十度のゆるやかな斜面を高さで百米ほど登つて氷棚のプラトリーに出る理想的な地（氷？）形でした。プラトリーはほとんど水平で極めて徐々になら向つて高まつており、結局海拔約三千里の南極点の台地につながるのです。基地は岸から四キロ奥に作ることに決まりました。氷の厚さ三五〇米くらい、底は海という推定ですがたしかなことは人工地震による測定がすまないとわかりません。

小生は建設作業が始まる前に越冬隊長たるベッキン・ロンネと一諸にスキーでそこに行つてみましたが、広漠たる雪原に二人ずつアンザインしたCB（建設部隊の兵隊）が幾組も二米ぐらゐの鉄索を持つてかくれたクレヴァスの探索をしており数年前の富士山の雪崩搜索を思い出しました。接岸の翌日、二十七日には砕氷艦が艦首をぶつつけて氷崖を削つ

て氷の「波止場」を作り次の日から本格的な荷揚げが始まりました。ブルトーザーが雪上にハイ・ウエイを作り、六台のヴィーゼル、八台のトラクターが橋を曳いて往復し二月九日まで六千トンの物資を基地に集積しました。その間に二十九日には建設部隊九十五人が寝泊りするための十五棟のシェームスウエイ・ハイツ（四・八米×七・二米、カマボコ型天幕に組立式の木の床をつけたもの、彼らは組立式のキャンパスのベッドに寝ていた）が建ち、すぐ十八棟の本建築が始まりました。間もなく両艦の乗員もヴィーゼルの引く橋で「通勤」して全面的に協力し昼夜兼行の作業になりました。もつとも夜といつても太陽が南にまわつて低くなるだけだから二十四時間労働には最適の条件です。

小生は上陸点から基地に至る一

宇奈月より劔岳

法大山岳部

昭和三十年年度の冬山の目標は行動能力の限界の拡大で、前穂高北尾根より槍を計画して実を結んだ三十一年度は上記の目標を基礎として更に大規模にして完全なる極地法登山の展開を目標に、宇奈月より劔の初トレースを狙った。

計画の具体化は秋山偵察合宿より始まる。昭和三十一年の秋は次の四隊にわかれ偵察を行った。

①宇奈月より僧、駒を経てウドの頭まで②ウドの頭、毛勝を経てブナクラ③毛勝谷より毛勝三山を経て池ノ平山まで④仙人谷より池

帯のクレヴァスやクラックの調査監視を担当して極地行八回のヴェテラン、アイク・シュロスバツと一諸に毎朝約二時間のスキーパトロールに出ました。気温は南風が吹く日は -15°C を上下し（最低 -30°C ）暖い北風が吹く日でも決してプラスにはならないのでサラサラの粉雪、この極心に続く大雪原にスキーを滑らすのは大きな楽しみでした。もつとも新雪にかくれたクレヴァスに片足を突込んでヒヤリとしたこともありましたが、艦の接岸しているすぐ上の斜面はせいぜい五度か十度なのになりにスピードを味えました。

午後には毎日建設現場に出かけて建築の詳細を見物しました。ちよつと規模が違ひすぎて、そのまま日本隊にもつてくることは出来ませんが、部分的には参考になる点もありました。しかし質的には

ノ平山、劔を経て弥陀ヶ原下山。

実際には水場の不足、物凄くブツシユ、悪天候などのために④以外は完全に偵察出来ず、殆ど白紙の状態のまま入山した。即ち①は駒までにとどまり、②はウドの頭を偵察し得たのみ、③は毛勝より赤谷山まで、④は予定以外に池ノ平山より大窓の頭まで、従つて駒毛勝間はウドの頭を除いて全くの白紙、赤谷山より大窓の頭間は文献にまかせた。

△計画と準備、方法は極地法登山、日数は本隊BH集結後四十日間を予定、幕営地はBH（宇奈月大原台スキーハウス）C1（僧附近）C2（駒附近）C3（ウドの頭附近）C4（毛勝附近）C5（ブ

日本隊の準備は決して彼らに劣つていないと思います。大体氷の上にあがつてからの仕事は日本に山登りないし探検に興味を持つわれわれの常識のレヴェルを出ないの、学ぶべき点は氷河の航行、基地の運び方および引揚げ時期のつかみ方にあつたというのが私の感じです。

二月十日になつて建設の進行九十パーセントのときバルマー半島の方から強い低気圧が吹雪を伴つて襲来し、接岸以来ニュー・アイスのほかをみながつた氷棚沿いの開水路に刻々と浮氷が押寄せるのがレーダーに映りました。あわただしい数刻の後急遽引揚げが決定され、越冬隊三十九名、およびなお建設に従事中のCBを残してまづ氷に対する防備の薄いワイアンドットがその夜の波止場を離れました。最後まで艦に残つて仕

ナクラの（コル）C6（赤ハゲ附近）C7（大窓の頭附近）ビバーク（三ノ窓）を予定した。

パーティは佐々木隊長以下二十二名、実際には佐々木が中途下山のため新主将五十島がリーダーとなり、合宿前半は約十九名、最後は十六名であつた。この計画遂行に当つては事前のボツカは米一粒もせず、また途中に小屋が一つもないので完全なボツカをやることとなつた。また器具は約一六〇貫食糧二七〇—二八〇貫、私物約七〇—八〇貫、計五百一五二〇貫とみた。

△行動予定 ポイントは前半の龐大な資材の運搬をどうさばくかウド附近の悪場と毛勝突破、日本

事をしていた数名の越冬隊員が吹雪の中で手をふつていただけで大部分は四キロ離れた基地で一刻を惜み働いていました。ワイアンドットは三連と行かないうちにニュー・アイスの中で働けなくなり（沖の浮氷からの圧力）翌日の夕方残つたCBを收容して追いついてくるスターテンアイランドを待つほかありませんでした。申し忘れましたが、小生帰路にはワイアンドットに乗り換えたのです。

それから数日はよい具合（？）に荒天が続いて浮氷原をこわしてくれたので二月十七日に氷海の外に出てプンタアレナス經由南米西岸を北上するスターテンアイランドと別れて、こちらはブエノスアイレスに直行しました。荒波の中でスターテンアイランドが艦首を波に洗われて霧の中に消えて行くのを見ると一抹の感慨を禁じ得ま

海岸の悪天候と天幕間の距離とに成否の鍵がかつていた。そのため荷と力の集中を重点的に、以後半C4の前進根拠地設営以後はラッシュで一気になタツク態勢に持ちこむことを考えた。

BHに全員集結して以来三十三日目に成功出来たことは部員一同のチームワークのためものであり日ごろの訓練の結果である。アタック予定は大体四月三—八日ごろとしていたが三月中は悪天候つづきで、C4設営まで大分日数を喰ひ、約五日ほど遅れた感があつた。完全晴天は三日のみ、しかしほぼ完全なタルミは吹雪の日が約十七日だつたのに対し六日のみであつた。四月に入り、アタック態

せんでした。このエクスペジションの立役者は何といつても、あのこの下に海があるとも見えないような氷塊の乱立した氷原に往きつ戻りつして路を開いた彼女でした。

もう今ごろは越冬隊員の手で残つた建築の仕事も完了していることと思いますが、基地はワシントンDCと直接無線連絡を置いて艦には情報が行かないので明後日ワシントンに行くまでは様子ばかりません。気温もどんどん下り建物に雪に埋もれかけていることでしょう。ノフォークの南は荒天の名所だそうで艦がゆれて字が書きにくい、読みにくいとも和れませんが悪しからず。

（三月二十七日、ワイアンドット艦上にて。）

勢に持ちこむころ、急に好天に恵まれ、またたくうちにC6・C7と予定をはるかにオーバーして天幕が伸び、前半で遅れた日程を取り戻し軽くアタック出来た。撤収は三—四日間十分と思われたがC7の只石のブレイキ、および雨による積雪悪化のため六日かつてしまった。石塚の凍傷も二日間のブレイキとなつた。いろいろと批判、検討するべき点はあるにせよ、大した事故もなく無事予定通り成功をおさめたことは、事前に、悪天候をついて動きまわつたということ、天候については、穂高方面と全く異なるので面くらつたが

風雪中における未知のルートの行動に自信が付き、また長期間の生活で新人の天幕マナーも板につき大いに得るところがあつた。ワッパ技術も深雪のラッセル続きで非常に上達した。これは地方の山岳地帯に欠くことの出来ない登山技術である。大雪の日は夜間二時間おきの除雪にもかかわらず天幕を埋められる苦い経験もした。天幕間の距離は平均五キロであるが、この距離は決して長すぎるものではなく、十分行動出来た。適当な場所さえあればまた延長する余地のあるところもあつた。人員は若干不足気味であつたが、適確な人員配置と部員一同の素晴らしいはたらきによつて行動のにぶるようなことはなかつた。(守屋記)

マ行動概要(昭和三十三年二月四月)秋山偵察合宿後練りに練られたこのプランは先発隊の行動開始によつて幕が切つて落された。二月二十二日から三日間は器具係り、食糧係り、薬品衛生係、気象通信係などの係りのもとに各部員が配置され、物品の購入と細目にわたる点検をすませた。食糧はレーション・システムをとり、ポリエチレンの袋に包装され、高所用は赤、中間は黄、低所は青とそれぞれのカートンボックスにつめこまれ、器具は器具で梱包し現地に輸送した。

二月二十五日先発隊五十島、山口、平野、平野、小林、高山、中村、渡辺の七名上野駅を夜行でたち、本隊入山の前三日三月五日まで食糧の現地調達とガソリン、石油の購入に当る。一六〇貫の器具と

三百貫近い食糧をBHに集結、八日間で餅つき、パン、その他現地調達した食糧の梱包と東京から輸送されてきた物品の整理、点検に費す。一石五斗にのぼる朝食用餅は一日でつき上げられた。

三月六日(雪)五日夜東京をたつた本隊佐々木、守屋、恩田、酒井、柏木、渡辺、石塚、小野、山本、只石、田山、滝田の十二名はBHに集結。

三月七日(曇後晴)午前五時全員起床、六時半平均重量六貫余を背に小雪ちらつく中をラッセルに喘ぎながら宇奈月尾根と鳥帽子尾根の合流点C1予定地まで荷上げをする。

三月八日(曇)前日のトレースにしたがい一人平均六貫、十九名で荷上げ。

三月九日(吹雪)はじめ左ほどなかつた雪も、何時しか強風を伴い表層雪崩に肝を冷す。C1までの荷上げは不可能とみてC1設置者佐々木、守屋、五十島、柏木、田山、滝田、只石、高山、渡辺、小川の十名と荷上げ隊八名は四〇〇米地点にデポして別れ、強風の中にC1が設置された。恩田下山。

三月十日(吹雪)昨夜の強風のためBHからの荷上げは出発を見あわせていたが、幾分小やみになるのを待つて出発、ラッセル深く風雪が強いので前進困難とみて昨日よりやや低い地点にデポ、C1は停滞。

三月十一日(雪)BHよりC1へのボッカ約五十貫、C1隊八名で僅ヶ岳まで荷上げを兼ねて偵察に向う。

三月十二日(雪)停滞、大坪入山。

三月十三日(晴後雪)BHより全員C1まで荷上げ、C1入りとなり、C1は三張の天幕村が出来た。C2へ出発の守屋以下五十島、田山、滝田、只石の五名の前進隊はガスが濃く、尾根が判明せず僅ヶ岳、駒ヶ岳の中間に飯のC2を設置。

三月十四日(風雪)C1は停滞C2は北又谷から吹上げる風と雪をおかして出発、尾根を求め、十時ごろ予定地駒ヶ岳ピークに達しC2を設置する。僅、駒間は巨大な雪庇が張り出し、そのつけ根が割れており歩行はかどらない。ラッセルは胸に近い。

三月十五日(雪後晴)C2は五十島、田山がウドの頭方面の偵察に、守屋、只石、滝田の三名はC1・C2間のルート工作に当り、C1は停滞、午後から晴れ。

三月十六日(晴、風強)風は強いが待望の晴天、中島入山、C2は全員C1へボッカに下り、新にC2へ酒井、山本、小野、中村の四名が入る。きょうの行動はフアイトに燃え大量の荷上げが出来総量約一〇〇貫、C2直前で滝田が肩の脱臼をおこし、酒井の治療により復元したが、荷上げ能力の点など行動に痛手となる。

三月十七日(吹雪)停滞。

三月十八日(快晴)入山以来初の快晴となる。午前三時に起床、出発はまだ薄暗い五時というのが平均した朝の時間である。C2隊は守屋、只石、田山、小野、中村がC3予定地までボッカ、五十島、酒井、山本が同じくC3までボツ

カ、それから先ウド方面に偵察に向う。きょうの荷上げ一人平均七貫、C2・C3間地図上では平坦だが、起伏が多く地形的に面白が増える一方危険性も増す。C3予定地より先はそれが激しく、ウダ谷側の雪庇が大きく口を開けて無気味な様相を呈している。C1より七名がC2までボッカ、遅ればせながらも荷は着々とあがつて

三月十九日(曇後雪、強風、酒井、五十島、田山、小野の四名でC3建設、残りのC2隊はC1へC1はC2へそれぞれボッカ、五貫平均、午後天候崩れ強風となる設置隊は駒とウドの中間一九六〇米ピークに天幕を張るも天候悪く工作はとりやめ。

三月二十日(吹雪後晴)C3の五十島、小野はC4へのルート工作に、吹雪のため先は思わしくないのでウドにフィックスの個所を定め、下りに二十米一本、四十米一本フィックスする。ウドの突破が第一の難関だが、荷を背負った新人にも通れるルートを探すのに一苦労、一番能率的で安全な場所の決定はむずかしい。酒井、田山はC2までボッカと連絡に下る。九時ごろガスの中でC2よりボッカに登つて来た守屋以下四名とすれ違う。C1は僅ヶ岳まで八名でボッカ。

三月二十一日(吹雪、降雪四十センチ)C3朝出発後吹雪となりルート工作を中止しC2へボッカに下る。風強くあらが体をいためつづける。C2附近まで下つたがC2隊と会えず引返す。C2も同

様出発後すぐ引返し、C1は停滞三月二十二日(吹雪、C3降雪一米)停滞。

三月二十三日(薄曇り、降雪一米)C3五十島、酒井、田山、小野六時に出発、C4ルート工作並びにボッカに当る。ウドの登りに三十米三本をフィックスする。部分的には少し急な斜面もあるが、大したことはなく、ただウダ谷側の雪庇と雪崩が恐い。雪崩の危険のない日は正面より取附いた方が楽なため、森林帯のルンゼにフィックスされた三十米二本は一応予備的なものとする。フィックスの上部二十米くらい危険地帯を通るが、これも森林帯の木を倒して安全地帯を通ることを考える。C2・C1ともハイキャンプ用荷上げ。

三月二十四日(吹雪、降雪一米)停滞、C3合唱、C2散髪とラッセル。

三月二十五日(晴後雪)C3は全力をあげてC4に荷上げ、一人平均七貫、C4予定地点までラッセル時間、荷物五貫以上で六時間かかる。帰りは三時間程度、きょうは各所に表層雪崩が出る。山口、柏木、只石、石塚C3入り。

三月二十六日(吹雪、強風)停滞。

三月二十七日(雪)お化けのような樹氷の雪が一度に落ち青いタネの葉が出ている。五十島、酒井、小野、只石、石塚の五名はC4設置、C4はオレンジ色のカマボコ天幕、これは広くて住み心地がよい。毛勝東北尾根上一九二〇米ピークである。

三月二十八日(雪)C4は視界

が悪く、先の工作、偵察はあきらめ全員デポ地まで下り荷上げをなす。きょうまで大団人員はC2・C3・C4に集結。

三月二十九日(快晴)どの天幕も久しぶりの快晴に出発早く、C4は四時朝食、五時半出発、毛勝には七時四十五分に登る。毛勝東北尾根五百米の登りはきつ、登りきるとすぐ剣をばはじめ今後トレースするルートを眺められる。一直線に登ってきたトレースをみて酒井の案により「天国への階段」と名づけた。但しここは雪崩の危険性あり。一昨年の京大西北尾根の際のキャンプ地を軽くこし一挙に猫又山の頂上にC5を出すことにする。きょうで荷はほとんどC3に上り、守屋、中島、渡辺、小林、高山、中村のメンバーがC3入りとなる。

別れて行動、偵察はブナクラ乗越までで、悪天候のために引返す。一方酒井、石塚は吹雪に叩かれたが毛勝まで行き、C4より来た渡辺、田山を迎えてC5に戻ったが、帰りのトレースは消え帰幕がはかどらず釜谷、毛勝のゴルで時間も遅くなったためC6用の天幕が上げてあつたのでやむなく仮設営する。石塚、強行と不注意から両足を凍傷にやられる。一方本日の行動で荷物は全部C4に集結した。C4へC3より二名入幕。

四月二日(吹雪)石塚の凍傷悪化のおそれあり、酒井単身吹雪をういてC5へ薬品をとり往復、出来る限りの手当をほどこし下山させ医者の治療を必要とした。C3・C4ともに行動は途中で中止する。

四月三日(吹雪)釜谷の仮天幕からのみ薬品の補充をかねて酒井田山C5へ、酒井は五十島と共に仮天幕への行動。

四月四日(快晴)折角の快晴にもかかわらず石塚の凍傷のため下向の行動となる。仮天幕より五十島、渡辺、石塚C3へ、五十島渡辺はC3到着後直ちにC4へ戻る。酒井、仮天幕往復C3へ、C4より山口、柏木、小野の三名C5入り、C5より二名で仮天幕を撤収、山本C1よりC4入り。滝田C1へ、きょうの一日はめまぐるしく、C6を伸ばすチャンスが失った。

四月五日(高曇り)C5より五名C6予定の白萩、赤ハゲのゴルを軽くこして、赤ハゲ、白ハゲのゴルまでルート工作ならびにボツカ、途中ブナクラのゴルの下り京

大は七十五米のフィックスをなしているがその必要なしと認めた。天幕間の距離も京大ではブナクラのC3、白萩、赤ハゲ間のC4であつたが、おれわれは猫又のC5から赤ハゲ、白ハゲのゴルへと二つの天幕を一挙に伸した。一方下ではC3から石塚をつれ酒井、小林がBHまで、守屋がサポートでC1まで、流田下山。

四月六日(快晴)赤ハゲ、白ハゲのゴルにC6設営、五十島、山口、柏木、山本、小野、只石入幕する。きょうのルートはやつとアイゼンをはく領域である。しかしやはり輪かんははずせず、コンビにして歩く。続いてC6では五十島、山口の両名昼から大窓のゴルへ偵察。石塚下山。

赤々とあがる、三十三日間にわたる苦労がこの一瞬大きな喜びと変つた。入山以来三十三日間にわたる北面尾根からの剣登頂に終止符をうつた。この日午後八時ガソリンに点火されたのしが岩と氷の世界に輝いた。これを合図にC6の諒解の火の手も、続いてC5からと各キャンプののしが点々と稜線にともつていった。

四月七日(快晴)C7設営、予定の大窓をこえ、一気に小窓コルに雪洞を掘りC7とする。アタック隊山口、柏木、サポート隊五十島、只石が入る。ローキャンプではアタックを予想して撤収態勢をととのえる。人員配置はC1一人、C2二人、C3四人、C4一人、C5二人、C6二人、C7四人となる。ウド附近は午前十一時から午後十時ごろまでたえず雪崩れていた。

四月八日(快晴)山口、柏木のアタック隊は五十島、只石のサポートを受け午前三時C7を後に剣頂上に出発、三の窓でサポート隊と別れアイゼンの水にきしむ音も快適に午前九時四十分頂上に立つ。晴れ上つた紺碧の空のも一つ時間近くも頂上にとどまり、下るのを惜しみがC7らに戻る。夜八時成功のろしが氷雪の稜線に

四月九日(晴後濃霧)C7の四名C6へ、途中サポートの只石がポストラナーとして急いでいる時大窓への下りでスリッパ、ももに打撲傷を負い歩行はかどらずC6泊りとなる。C4は撤収してC3へ、C5より一名C3入り。

四月十日(風雨)入山以来はじめての雨、すでに雪はとけ出し、撤収にはブッシュ漕ぎとなるところもある。クラスト、ブッシュ漕ぎ、雪庇のつけ根の穴など下りのルートは千差万別である。C6から六名C5へ、C3よりC1へ、C2は撤収、C1五名。

四月十一日(風雨)C1撤収七名BHへ、C5撤収五名C4へ、二名C3へ。

四月十二日(曇)ハイキャンプ全員C3集結(九名)BHから四名C1近くまで迎えに出たが徒労。

四月十三日(快晴)ウドのフィックスをはずしハイキャンプの人員はC1へ、フィックスは三十米五本、二十米五本、十米二本の二七〇米用意したが、ウド附近に一五〇米のフィックスをしただけであつた。ブナクラで京大が七十五米のフィックスをしているので、それを計算に入れて用意したので

が、必要なしと認め使用しなかつた。守屋、五十島、中島の三名がフィックスを撤収、アタック隊員は一気にBHへ。

四月十四日(晴後雨)午前七時全員BH集結、撤収完了、昼食後宇奈月へ。

四月十六日全員帰京。(酒井)

冬の日高山脈

早大山岳部

編成

ボロシリ隊編成(監督代理 塚本茂樹)

◇第一隊 菊島芳彦(商三)(リーダー) 川村浩之(文二)(燃料係)

井口昌彦(理二)

◇第二隊 松浦輝夫(教四) 田村修一(政二)(食糧係) 松尾良久(政二)(医療係)

◇第三隊 川口和雄(商三)(マネージャー) 藤原康明(理二) 宇田川良久(理二)(個人装備係)

鍋木昇(政一)

◇第四隊 吉川尚郎(法四) 高野洋志雄(政二) 山本晃(文一)

成川隆顕(文一)

◇第五隊 田中将利(政四) 中島宏(理二) 小山雄敏(政二)(記録係) 鈴木武士(文一) 浜野吉生(法一)

◇第六隊 中島亨(法四) 菅琢康之助(政二) 杉山正洋(政一)

高橋宏行(政一)

神威岳隊編成

◇第一隊 川口和雄、高野洋志雄、中島宏、小山雄敏

◇第二隊 吉川尚郎、藤原康明、平松文雄、宇田川良久

◇第三隊 中島亨、菅琢、田村修一、浜野吉生

◇第四隊 菊島芳彦、川村浩之、松尾良久、鈴木武士、高橋宏行

◇第五隊 松浦輝夫、井口昌彦、鍋木昇、杉山正洋、杉山康之助

成川隆顕、山本晃
◇別動員 田中将利
行 動

昭和三十三年二月十四日 先発隊六名は上野駅を多数の見送りをうけて二〇時一〇分の急行北斗号で出発。

二月十五日 連絡線に九時乗込む。海を渡る合宿が初めての我々にとつて遠征気分はいやがうえにも増して来た。函館よりマリモ号で一路帯広に向う。

二月十六日 晴 四時帯広着。昼すぎ菅野宅に着き秋に送った荷の点検。

二月十七日 小雪後晴 全員、トラックに荷を積みB・Hへ向う。B・Hは札内川のダム工事のため建てられた飯場を使用。

二月十八日 曇り時々小雪 三名でB・C予定地を調べに奥の二股まで偵察に行く。トラックがかなり奥まで入るので、B・C予定地だった二股は、この奥の二股に変更する予定。本隊は北斗で上野を出発。

二月十九日 曇り時々晴 食糧のパッキング及び小屋の整理、薪作りに精を出す。

二月二十日 曇り時々晴 一時半本隊B・C着。食糧を組合せ、自動車の入る所まで荷物をデポする。

二月二十一日 晴時々曇り デポ地よりスキーでB・C(奥の二股)建設に向う。B・Cにはドーム一張り、夏天二張りを張る。

二月二十二日 曇り後雨(零下11度)零下8度 A・B・Cまでのルート工作のために五名が出かける。沢をつめて尾根の末端が三分

している真中の尾根に取付く。尾根上は胸までのラッセル。ルートに旗、ナタ目をつけてB・Cに下る。他全員はボツカ。

二月二十三日 曇り後小雪(零下10度)零下8度 ルート補強及び荷上げのため三名はA・B・C予定地に向う。稜線は雪は案外少ない。今日でB・Cの荷物は全部上り全員B・Cに集結した。

二月二十四日 曇り後雨(零下15度)零下11度 全員でA・B・C建設に向う。風雪の中でアークチック三人用ミッド二張りを張ってA・B・Cを設け、二隊が入る。

二月二十五日 雪(B・C零下9度)零下8度(A・B・C零下17度) A・B・Cの二隊はC1までのルート工作に出たが、強風と境界がきかぬため引返す、再び出たが、一八三三米峰はA・B・Cから引返す。三三・四隊はA・B・Cに入り。

二月二十六日 晴後小雪(A・B・C零下20度)零下15度(B・C零下14度)零下9度 A・B・Cの二・三・四隊はC1建設に向う。稜線はブレイカブルクラストで歩きにくい。一八二三米峰を下ったコルにC1を設け三隊が入る。

二月二十七日 雪 C1の三名はC2のルート工作に出るも視界がきかずカムイエクウチカウシ岳の下より引返す。途中一八五〇米峰の下に三〇米ザイルをフィックスする。B・Cは石油火傷の平松を残して全員A・B・C入り。

二月二十八日 晴後小雨(C1零下20度)零下14度(A・B・C零下15度)零下10度 C1の三隊はC2までのルート工作及びボツカルに向う。一八五〇米峰の下にフィックス

ス三〇米で補強。春別岳の手前のピークのコルに荷物をデポ。A・B・Cの一・二・三・四隊はC1入り。

三月一日 快晴(C1零下23度)零下18度(A・B・C零下20度)零下18度 C1の一・二・三・四隊はC2建設に向う。昨日のデポ地にテント二張りを張ってC2を建設し一・二・三隊が入る。

三月二日 晴後小雪(C2零下18度)零下17度 一・二・三隊はC3建設に向う。C2から二番目のピークの登りが悪い。C3はエサオマントツバツの頂上に建設。C3には一・二隊が入る。

三月三日 晴後強風高曇(C2零下14度)零下13度 不気味な朝焼けの中をC4建設に向う。一七九一米峰の頭にC4を建設する。ここに二隊と二隊の田村がサポートとして入る。

三月四日 風雪(A・B・C零下16度)零下18度 アタック予定日の今日は猛風雪。各テントは余儀なく停滞。終日除雪に悩まされる。

三月五日 晴後曇(A・B・C零下14度)零下12度 ボロシリ岳アタック。昨夜まで荒れ狂っていた吹雪は何処へやら、あたりは物音一つない静寂だ。午前四時サポート田村の作ってくれた心づくしの朝食をとり、ようやく明るくなつた頃、都の西北に送られ勇躍テントを出発する。昨日からの風雪でラッセルも相当にきつい。いくつものピークを越え、戸蔭別岳を越える七ツ沼カール上部のやせたリッヂは日高側を捲き気味に行く。幌尻の登りがかかると急に雪が堅くなつた感じだ。肩についた頃より急にガスが濃くなり、その中にぼん

やり頂上が浮いて見える。最後のがんばりで頂上直下の斜面を登り切るると平らな雪稜が広がっている。午前九時半頂上に立つ。早速持つて来た大きな棒を立てW旗をひるがえす。この一年間の努力が実を結んだのだ。帰途は緊張していた気がゆるんだのが、思うように歩が運ばない。松浦の笑顔にむかえられてC4へ、C4を撤収して一気にC3までとばす。気はせくさだが如何せん足許がいうことをきかない。C3についた時は、もうあたりは真暗だ。綿のようにつかれた体をテントの中になげ入れる。口をきく者もない。力を全部出した感じがした。 (菊島)

三月六日 晴 (A・B・C零下14度)零下13度 A・B・Cでは神威方面の行動が始った。ボロシリ方面より雪庇が多く注意を要した。

三月七日 晴(A・B・C零下15度)零下15度 C2の一・二・三隊は撤収して一挙にA・B・C入り。ボロシリアタック成功に全員足も軽くなりそうだが連日の行動で少し疲れ気味だった。

三月八日 高曇り後雨(A・B・C零下11度)零下15度 C1の四隊も撤収。久しぶりに全員A・B・Cに集結して一大テント村が出来上つた。

三月九日 風雪(A・B・C零下12度)零下11度 風雪のため停滞。石油の不足ひくくなる。

三月十日 風雪(A・B・C零下10度)零下12度 C1建設のため進出したがラッセルと強風のため進めず一七二二米峰を下ったコルに幕営する。

三月十一日 晴後曇り(C1零下14度、13度) C1建設のためにラッセルを予想してラッセル隊に二隊が先行。ヤオロマツッからは十勝側に大きな雪庇が出ていて危険である。一五九九米峰手前のコルにC1を建設し一・二・三隊が入る。

三月十二日 曇後雪(C1零下13度、12度) C1の全員でC2建設に向う。相変らず腰までのラッセルに悩まされる。ルベツネの北峰にC2を建設する。こゝに一・二隊が入る。

三月十三日 強風曇り後晴(C2零下14度、15度) C2の一・二隊は風雪についてC3の建設に向う。ベテガリの頂上からは東尾根(早稲田尾根)が延々とつづいて

いる。ブッシュでやせており当時の苦勞がうかがわれ感無量である。C3は中の岳の手前のピーク下に建設する。テント場は広く海が近くに眺められる快適な所である。B・Cでは荷下げが始まった。

三月十四日 風雪後晴(C3零下15度、13度) 神威アタック。離京以来丁度一カ月後のこの日望望の神威岳の頂に立つことが出来た。四時に朝食を済ませたが悪天候のためテントに釘付けにされ一時は今日の登頂は断念せねばなるまいと思われたが、九時過ぎ風が弱まったので直ぐテントからとび出した。登るにつれて雪もやみ東風に濃いガスが西へとばされ中の岳についた頃は太陽が顔を出した。ラッセルはひどく神威はガスで見えない。時間はみるみる過ぎて行く。神威への最後の登りは初めてアイゼンがきいた。皆空腹も

忘れ夢中になつて頂上を目指し三時半風当りの強い頂上に立つた。C3を出てから六時間休むいとまもなく遂に辿りついたのだ。三月五日ポロシリにそして今日神威に部の総力を結集してW旗をうち立てることが出来たのだ。簡単に腹ごしらえをして追われるように四時頂上を後にした。一四八三米峰の下りにかかる頃が暮れ東風が急に強くなつた。幸い天気は崩れそうもなく月の光をたよりたにたそうC3へと急いだ。C3へつたのが八時。無言のうちに皆の感激は頂上に立つた時以上に大きかった。

三月十五日 快晴(C1零下13度、12度) いよいよ撤収である。一隊は一挙にC1入り。夜C1よりアタック成功のフライヤーを上げる。

三月十六日 強風晴後雪(C1零下12度) 全員A・B・C入り。集った皆の顔は日に焼けて真黒だ。ストーブをかこんで話し合えるB・Cはわが家に帰つたようだ。

三月十七日 曇り B・Cを撤収して全員スキーで下る。春も近く、川の氷結も大分とけて来たがB・Cの五隊が作つてくれた木の橋を渡つてなんなくデポに着く。こゝからは中札内役場と萩村建設のトラックを貸していただく。日高の山は雲の中に消えて眺めることは出来なかつた。もう二度と来ることがないかもしれぬこの山に別れを告げて、広漠たる雪原を一路中札内へ向つた。

ウェストン祭 七月六、七日上高地で例年の通り行います。

神威岳遭難報告

立大山岳部

◇計画 戦後の混乱期においてわれわれの諸先輩が諸情勢の幾多の困難を克服して辿つた足跡を受け継いだわれわれは各年度における最大の課題として目したところの諸目標、即ち、昭和二十八年後立山嶺冬期初縦走、二十九年春北鎌尾根より極地法による槍ヶ岳全員登頂、三十年春準極地法に依る西穂高岳より槍ヶ岳、前穂高岳、同年冬奥穂高ジャンダルム飛騨尾根より北穂高岳登攀と同時に明神東稜より北穂高岳への初縦走等を次々に解決して来た。しかるに、三十二年春、これらを基盤として得た総力をもつて極地法によつて前穂高岳北尾根より、前穂高岳、奥穂高岳、西穂高岳、北穂高岳の登頂を目指しての行動遂次、八峰直下の後稜上において不幸板状雪崩に見舞われ事故者一名を生じた。

この間において全面的に反省し、客観的立場より批判を下し、今後歩むべき途を決定した。即ち、部員個々の実力を強化し、その総力をもつて合宿に当るべきは言をまたぬが、それを如実に現わすには部員各々の体力と精神力並びに、山に対するより高度な知識の吸収を強化するにありと結論し、これを充たすべき山行計画として縦走方式を選び、われわれが常に求めて止まぬところのより激しい試練を受け、未和をもつて和となし未来を生ずるに原始をもつてなすべく

その場を、積雪期日高山脈に求めその全山縦走を目した。

◇行動計画 縦走隊 日高線本桐駅より、トラクにてケリマツ川を経て、奥高見開拓地へ、これよりメナベシ川、コイカクシユビチャリ川を溯行し、途中イベツの造材小舎を中継し銅山小屋へ入り、サポート隊の支援を受け中ノ岳より神威岳を往復し、これより国境後線を北上、九ヶ所に幕営し、中の岳①ベテガリ岳②ヤオロマツッ岳③一八二二米峰④カムイェクウチカウシ山⑤エサオマントツタベツ岳⑥カムイ岳⑦トツタベツ岳⑧パイロ岳⑨を経てパイロ岳東尾根一七二二米峰よりトツタベツ川へ下る。この間トツタベツ岳より最高峰日高幌尻岳のアタックを敢行する。

サポート隊Ⅰ 縦走隊と行を共にし本桐より入山し、中ノ岳に幕営を終え、縦走隊が神威岳を往復をして居る間ベテガリ岳への荷上げを行い、縦走隊を見送つた後往路下山する。本桐・帯広一八千代を経由してトツタベツ川をさかのぼりエサオマントツタベツ川出合B・Hへ入り縦走隊の入るのを待つ。

サポート隊Ⅱ

帯広より八千代線八千代駅にて下車、トツタベツ川を溯行してエサオマントツタベツ川出合B・Hに入り、エサオマントツタベツ川東北尾根にC1、エサオマントツタベツ岳手前にC2を建設し縦走隊と合流し、食糧、燃料等を補給した後天幕を撤収しB・Hよりパイロ岳東尾根一七二二米峰へのトレースを行い縦走隊の下るのを待つ。

撤収

サポートⅠ・Ⅱ隊がエサオマントツタベツ川出合B・Hで合流し縦走隊のパイロ岳東尾根一七二二米峰より下山を待った後全員をもつて八千代へ下る。

行動概要

昭和三十三年二月十日、先発隊二名、急行「北上」にて出発し本隊の入山までに、器具、食糧をB・H、銅山小舎まで人夫を使用して荷上げするも、人夫不足により三又までしか荷上げ出来ず。十七日十和田にて出発した本隊八名と十八日高見開拓地に合流した。

二十日奥高見開拓地より、メナベシ川右岸を溯行し、イベツ川出合造材小舎に泊る、翌二十一日、イベツ小舎よりB・H銅山小舎に入りこの日の内に、七名をもつて三又デポ地点より荷上げを行い、二名で中ノ岳西尾根の偵察を行つたが五万分の一の地図では全然問題にならぬほど正確であり無駄に時間を費した。

二十二日昨日のメンバーにより二名にて偵察を行い中ノ岳西尾根C1予定地を探すことが出来一三

○七米峰直下より引かえした。他は三より残りの荷物の荷上げを終え、ここに登攀体制が整った。

二月二十三日 曇り時々晴
六時二十分 B・H を出発全員で荷上げを行う。ベテガリ沢を渡渉し左岸に取付く、これより中ノ岳西尾根の森林地帯を登り十時三十五分地図上一一〇〇米 C1 予定地に荷物をデポして下る。B・H 着十三時五十分。

二月二十四日 曇り後雪
六時 B・H を出発、昨日に引続き二回目のボッカを行う、C1・C2 縦走用の器具食糧を合わせて七〇貫の荷物を荷上げすることが出来た。

二月二十五日 風雪 滞る

二月二十六日 後曇り

六時三〇分 B・H を出発、小舎を出るころは大変冷込んでいたが、だん／＼暖かく内地の春山を思わせるような気候である。

C1 には三人用ウインバーと六人用ウインバー二張を張る。

山野井、平井、八木の三名で C1・C2 間、ラクダの背状の尾根第一峰に三十米二本、二峰に四十米、三十米各一本 F1X を行う。

二月二十七日 雪

六時四十五分 C1 を出発、一人五貫平均のボッカ量、雪庇はベッピリガイ沢側より吹く風に依り、ベテガリ沢に一一五〇米～二〇〇米ぐらゐ張出している。稜線上は岳樺の枝に荷物が引掛り非常に歩きにくい。

地図上一三〇七米峰は実際には一五〇〇～一五五〇米ぐらゐあると思う。C2 は中ノ岳南肩を予定し四十五貫の荷物をデポして引か

えず。C1 着十時四十五分。

二月二十八日 無風 快晴
無人の C1 を後に全員 C2 へ向う。眩しいばかりの中ノ岳、ベテガリ岳、ヤオロマップ岳等に見とれ、シャッターがしきりに動く、

中ノ岳南肩に六人用ナイロンウインバー四人用ナイロンウインバー二張りを設置、昼食後馬淵、八木の二名によりベテガリ岳方面最低鞍部までと、山野井、石田によって神威岳方面一四八三米峰までの偵察を終え、それらの報告により今後の行動を検討し、デポ地点確認と時間的にも長いベテガリ岳のボッカに、平井が加わり代りとして一年井上が神威岳アタックに入ることになった。

夕刻より夜半にかけ約三十糎の降雪に見舞われ明日の行動があやぶまれる。

三月一日 快晴

五時四十五分カムイアタックパ一ティ(山野井、富代、井上)を見送り、縦走隊器具食糧のボッカ隊、馬淵、平井、八木、石田、牧口、関口はベテガリ岳に向い出発昨夜の降雪により、偵察時のラッセルは全く消え、中ノ岳の下りにザイル三〇〇米一本を使用して下る。

最低鞍部より登り最初のピークを下り掛けた時、中ノ川側に張出している雪庇、雪壁の崩落により、トツの馬淵中ノ川上部に転落雪崩を誘発して川底まで流さる、時九時三十分、雪崩停止を認め安全な場所まで引かえし、八木、関口の両名、神威岳アタックパ一ティへ連絡のため C2 へ向う。石田、牧口縦走用の三人用天幕をその場に

張り、平井そこより張り出して尾根を伝い下るも、雪崩停止地点に到達出来ず引かえず。
神威岳アタックを終えた三名八木の連絡により山野井個人装備を持って現場に向う。

救援並びに捜索経過

一、全力をもって救出に当る
一、C2 より八木連絡のため下山す

一、極地法をもつてこれに当る、現場幕営地を C3 とす
一、C2 には九人二分の食糧を残し C3 に荷上りす

一、C3 山野井、平井、牧口、石田。C2 富代、関口、井上
一、全員 C3 に集結す

一、C3 四人用天幕一張増設す

三月二日 快晴

八木連絡のため C2 より下山、富代、井上、関口隊 C2 より C3 荷上げ、石田、牧口 C3 よりこれをサポートす。山野井、平井隊、昨日平井の下つた尾根を下り途中より雪崩停止点へ向つて左側派出尾根を降つたが、下は約五十米のゴルジュになり下降不可能、往路引かえし次に最低鞍部より張出している尾根を下り、川底に達すも沢床凍結により沢の下降不可能である。

三月三日 晴後曇り

C2 富代、井上、関口、C3 入り、山野井、平井 C3 直下の尾根を下り、中ノ川の中ノ岳、ベテガリ岳東尾根頭との分岐点、二又に到達、右又をそ行す、沢は狭い所の間、三〇米ほどのゴルジュ状の廊下、いわゆる函である。川面の広くなつた所には左右からのデブリでつまり、始終雪崩の危険に晒される。川底より雪庇崩落場所の

見通しがつかず何所のデブリか、まづたく見当がつかない。時間的にも非常に危険に見舞われている現在引かえしを余儀なくされ標識をつけ引かえず。今の沢の状態では日中の行動は不可能により、明日より日照前後即ち、夜間に行動することに決定す。

明日の天候により午前二時より行動を開始す。

三月四日 雪 滞る

三月五日 晴後雪
昨日の降雪により、晴天二日待たなければ行動不可能のため、稜上の食糧不足と、東京本部に現場の状況を報告、捜索続行に必要な器具、食糧等の荷上を兼ねて、C3 に山野井、富代を残して、一年井上、石田、牧口、関口の四人と平井、中ノ岳頂上まで C3 の兩名の送りを受け下る。昨日の降雪により二日目のラッセルは全然なく、一同雪庇ノイローゼのため行動が思うようにはかどらない。

三月六日 曇り

B・H に石田、関口新切りを行い、平井、井上、牧口奥高見へ向つたが、イベツの小屋にて救援浅倉、山下両氏と二日連絡にこつた八木と八木二名に合流、こつた山下連絡のため本棚へ向い他は銅山小舎 B・H に入る。

現場の状況説明と、一昨日よりの天候悪化により捜索続行不可能と結論、撤収行動にうつつた。

この日奥高見より米軍ヘリコプターに八木便乗現場附近を飛行したが、天候状態悪く、C3 すら見出すことが出来なかつた。

三月七日 晴後曇り

C1 牧口、関口、C2 浅倉、平

井、八木、石田、井上がそれぞれ入り、明日行動可能な場合撤収とした。

三月八日 高曇り
C2 より浅倉、平井、八木 C3 に向う。C3 隊と合流富代、八木により撤収を行う。山野井、浅倉平井の三名で、現状調査を行った後 B・H に向う。

C2 にて井上、石田、C1 にて牧口、関口と合流し B・H へ入る。

三月九日 B・H 銅山小屋より、全装備を持ち、イベツ小舎に泊り、十日イベツ小舎を出発し、浅倉連絡に一足先に発つた。奥高見にて馬淵父君、山下、高橋の出向えを受ける。遭材トラックに便乗し、この日の内に本棚へ下る。

ここにおいて事故発生より当日までに収集せる、地元有力諸方面よりの情報及び、現役部員、現場監督並に、現役の協議の結果、現場状況が最早や種々の条件により捜索行動不能と結論、馬淵氏のご同意を得て捜索打ちを決定した。

引続き事後の処置を協議し、地元有力各方面に対し、今後の現地情報提供を依頼し、それらを総合判断して適当な時期を揃えて次回捜索を行うことを決し、全員帰京の途についた。

なお今後の捜索方針としては、現在までに得た、各種情報を総合判断して融雪期である五月中旬より、六月中旬の間にその時期を持つこととし具体的方法、日時等については、地元有力諸方面よりの協力により、遂次もたらされる情報を得て遅くとも四月一杯には確定出来る見込みである。

小窓尾根遭難報告

甲南大山岳部

甲南大山岳部は今春剣岳で遭難、ついに犠牲者を出した。事件後直ちに救援隊を組織し全力をあげて捜索が行われたが、遺体を収容出来ぬまま、第一回の捜索を打ち止める止むなきに到った。

部は剣岳積雪期集中登山を当面の目標とし、まず剣岳西面の概念を得るため昭和三十一年春早月尾根を登攀、三十二年春は小窓尾根を目標として計画した。

三月十六日 キワラ谷合出にベリス・キャンブ建設、夕方小窓尾根取付点を偵察。

十七日 滞在。

十八日(晴)午前〇・四〇全員五名B・C発、二・一〇尾根上に出る。午前四・三〇一七五〇米地点で雨宮、伊丹のサポート隊は引返し麻島、竹中、福永のアタック隊はそのまゝ前進す。アタック隊はピークの予定をしていたが、午後五時ごろ小窓の頭とおぼしいピークに達したので予定を変更下山にかかる。小窓のコルとおぼしい鞍部からアンザイレンして白萩川側へ約四百米下つたが流となり下降不可能となる。時に七・三〇既に暗闇となり、ビバークすべく行動中に墜落、数回バウンドして谷底まで落ちた。この墜落により福永君は死亡、麻島は頭部及び全身打撲、竹中は左手首骨折、足部捻挫、そのまゝビバークする。

十九日 暗いうち麻島は救援を

求めるため出発、朝になつても来援がないので竹中も出発、間もなく麻島が倒れているのを発見した。午前七・五〇竹中はB・Cに到着報告する。伊丹と雨宮は直ちに出発、一〇・〇〇ごろ麻島を発見しB・Cに収容した。雨宮はそのまゝ、発電所取入口に下り学校に連絡、引続いて負傷者を下した。伊丹は附近にいた大阪府大、福井大、成城大の応援を得て夕方福永君を収容すべく小窓谷に入り夜十一・〇〇まで捜索したが降雪とガスのため発見出来ず。

二十日 甲南より救援隊現地に到着、負傷者を収容、入院させた。

二十一日 救援隊五名は午前二・〇〇出発、捜索したが七時ごろから吹雪となり雪崩発生のため中止する。

二十二日(二十八日) この間吹雪続き捜索不可能。

二十九日 午前零時出発、八・〇〇まで捜索するも墜落点附近は積雪二米に及び、雪崩、デブリもあり捜索は不可能と断定し、小窓尾根対岸の尾根から遭難点附近を偵察、写真撮影、スケッチをして第一回捜索を打ち切った。

検討の結果、アタック隊は小窓の頭には達せず、それより下のピークを誤認し小窓尾根から小窓谷に落ちていたルンゼのうち、小窓の頭より数えて二本目のものを多分小窓谷と誤つて下つた。したがって遺体は小窓谷とそのルンゼの出合附近にあるものと想定するといふ結論を得、五月初旬偵察隊を出し、捜索可能な直ちに第二回捜索を行い、不可能ならば七月に行うことにきめた。

山日記の記事欄

松丸 秀夫

山日記一九五七年版所載、今西寿雄氏の「積雪期の山」に対し関根吉郎氏の反論が会報一九〇号誌上に掲載された。この論文は大分反響があつたようで、それについて山日記編集室としての見解を述べるべきであるといつてくれた人が何人もあつた。相当多くの人々が要望していられたらしいので、編集室の考え方を述べてみたい。

山日記の記事は便宜か論説かといふ聞かれるのであるが、いづれと断定するわけには行かないであろう。しかし日本山岳会の長い歴史の中で磨かれて来たもので一流の人物が力をこめた力作であることに異議はないようである。そのために方々で新人教育の教科書として用いられていて、教科書として具合のよいものにしてくれとの要望も少なくないのであるが、その要望の中には昨年と本年と記事の内容が違つていてと具合が悪いとか、常識とされていることが違つてと質問されたとき返答に困るとかいろいろなのがあるが、それらの要望の中で、教科書である山日記に書いてある内容が年によつて変つては困るから決定した常識だけをのせろといわれるのは間違いだと思ふ。立派な権威ある記事であるからといつて山日記が不変不磨のクラシックだとは考えられない。

毎年改称して年の暮れに出版するからには、そして第一級の人物が分担して各方面の論説を書いているからにはむしろ年間評論と

しての性格が出るようになるのは当然であろう。

今西氏に執筆を依頼した場合の編集室の考え方はちやうどその通りであつて、歴史的な業績を残して来た代表的人物に山日記の枠の中であるべく自由に意見を述べて頂き、一九五七年山日記に歴史のケルンを積もうと考えたわけである。今西氏もそのことをよく承けて下さつたようで、極めて多忙の中からマナスル登攀の年の山日記を飾るにふさわしいアニエラルレビューを書いて頂いたと私は喜んでゐた。

アニエラルレビューは著者の考えの本年の決算であるから他の人が反論を掲げるのも至極当然のことといわなければならない。関根氏が長い間やつて来られた大きなシステムのあつたことは誰でも知っていることで、同氏が反論を会報にのせられて意見を聞かれるのは甚だ結構なことである。

一流の人物の間で山日記を台にして論争が展開されることは山日記を前進させるもので望ましいことであり、多くの人々に好感を持たれる筈だと思ふ。ただ今西氏にお氣の毒に思ふのは氏は極めて多忙の中で山日記に対する善意だけで引受けられたので今回の関根氏の反論をこのときは少しも予期しないので素朴に書かれたのであろうことである。

記事欄は年間の評論であるといつても科学的な内容や調査記事は事情が違つて極めて慎重であることが望ましい、今までも出来るだけその線に沿つてやつて来られた筈である、一例を申し上げますと「日

本の山と峠」は地理調査所にお願ひしているものであるが、公文書の記載から拾つたものを台にし、それに山日記の旧版や編集室からの質問を調べて追加修正してある。公文書にない山や峠は地理調査所からいえばヴァリエーションなので、村役場に質問書を出し、そういう山や峠は確かに存在するか、存在すれば地名はどこで、どの辺かと聞く。村役場から存在すると返事があれば、測量のデータを調べて標高を決めて頂いているのである。このような慎重なやり方が総ての調査記事に行われるようになりたいと願ひしているもので、山小屋の調査においても小屋主からの回答を支部の権威者に見て頂いて加筆修正して頂いて正確を期しているが未だ思うようにゆかない地方があるのは残念である。

しかし再び筆を転ずれば登山は畢竟山における人間の心掛けの問題に帰するものであるから便覧の正確さだけでは山日記は満足されないものなのであつて、評論の必要もここから生ずるのである。このことが「登山用語」に鮮かにあらわれているのに注目願ひたい。用語集の短い文のなかに筆者の個性が強調され、行動と心掛けの典として読者に強くアツピールしていると思ふ。これらが時に関根氏の反論のようなこととなるのも当然のことと考えたいのではなからうか。

南極観測隊歓迎会 去る四月二十四日帰国した渡辺兵力氏らの歓迎会を六月五日午後五時山ノ上ホテルで開いた。なお村山雅美氏は明年の越冬隊長と決定した。

図書紹介

若き日の山行

GL・ラシュナル共著
近藤 藤 等 訳

モリス・エルゾグと共に世界ではじめて八千メートルの山に登ったルイ・ラシュナルの伝記である。文字通り山に生き、そして山に死んだ一人のフランスの山男の生涯がなまじく書き出され、異色ある伝記となっている。妻と二人の子供をかかえ、生活と闘いながらなお山への精進を続けるラシュナル、正式に待望のシャモニのガイドとなつても、依然アマチュアとしてテレビと共に激しい岩登りを次ぎ次ぎと試みるラシュナル、非常にエネルギーシユナルがそこに展開されてくるのが興味を引く。いつてみればここに書かれていたラシュナルの登山は、そのまゝ戦後のフランス登山界の縮図ともみられるのではないかと思う。アルプスで最も困難な場所とされているウォーカーバットレスの第三登、アイガー北壁の第二登をはじめ、その他名だたるルートにラシュナルとテレビのペアはいずれも非常にすばらしいスピードをもつてこなしているのだから、体力的にも技術的にも、まさしくスーパーマンの行動を示している。フランスの登山界における一つの風潮がここに示されている点、この本の価値は大きいものといえる。

第五部のアンナブルナ遠征では

ラシュナルの素朴な日誌が発表されているのも興味深く、そして一九五五年の十一月彼が三十五才の生涯を閉じたヴァレ・ブランシュのクレバスの真黒い割れ目の写真が不気味に巻末を飾っている。

昭和三十二年五月十日白水社発行、二八七頁、写真十二葉、三二〇円

雪男探検記

R・イザード著
村木潤次郎訳

少しおかしないいかただが、相次いで出版されるヒマラヤの登山報告書よりはるかに興味の深い読みものである。しかも、ヒマラヤというものの概念がよりフアマリアに理解出来るというのがこの本である。一九五四年英国のデイリー・メール紙がスポンサーとなり同社記者イザードをリーダーとして雪男を求めネパールの山中をさまよひ歩く紀行で、過去、現在にわたる雪男の消息をくわしく本書は追及している。シェルパをはじめ色々々な方面から雪男について集めた情報や、クムジュン、パンボチエなどの寺院に保存されているイエティの頭皮の調査などから次第に読者に雪男に関する知識をあたえて興味を引くつてゆくところなど著者の書きかたもなかなかつぼを心得ている。一番スリルのあるのはやはりチャンボチエ寺院附近を中心に実地に苦勞を重ねながら雪男の足あとを追及するくだり

で、結局その苦心もついにむくられず引上げるのだが、とにかく熊でも猿でもない雪男の存在を確

認していることはこの探検隊の大きな収穫となつてゐる。付録の中に雪男の想像図のついているのも面白いし、ツェレンスキーが世界の他の地域ではすでに絶滅した大型の哺乳動物が、中央アジアにはなおいくつか生存している事実から二十世紀の謎雪男も近い将来、科学はやがて発見するであろうと予言しているのも一読の価値がある。村木君の訳もすこぶるなめらかで読みやすい。ただ本屋の誤りだそうだが探検が探検となつてゐるのが目ざわりである。(山崎)

登高行十五号

慶応大学山岳部

昭和二十年から昭和三十年まで戦後十年間における慶応山岳部の歩んできた道が克明にまとめられて登高行十五号が発行された。主な内容は、春の南アルプス主脈縦走(田中慧一郎)春の剣岳より西穂高へ(宮下秀樹)冬の針の木岳より前穂高岳へ(石島襄二)山岳とスキーの思い出(鹿子木員信)此度のチーム・ワーク(横有恒)シツキへの憧れ(三田幸夫)ヒマラヤ登山者の食糧問題(ティースデル、山田二郎訳)雪洞報告(宮下秀樹)年度報告、山行記録(遭難報告、雪の構造と雪山(セリグマン、同部訳)となつてゐる。慶大の登高行といえは、いうまでもなく日本の登山界において最も権威のある部報であり、その伝統も一番古いものである。戦前のどの号をひもといへば必ず何かし

本邦最初の山の書物誌

山と書物

小林義正著

近日発売・予価 950 円
A5判 布クロス上製
260 頁・写真 77 葉

山を好む者は書物を愛すという。本書は山と書物に限りない愛情を捧げる著者が書いた、吾国最初の山の書物誌である。江戸中期から明治末年に至るわが国初期の山岳文献と、はゞその年代に見合う西欧の図書に對象を刺すところなく、初期の内外山岳文献を知る上の好指針といえよう。

「峽中紀行」「雪華図説」「マッターホーン登攀記」から第一回のエヴェレスト遠征から登頂までの記録など何れも原著を彷彿させる写真版七十数葉もまた出色である。広く登山家並に書物愛好家の机辺に薦める。

既刊 信大教授 小林国夫著

日本アルプスの自然

氏氏氏
郎郎郎
三三三
方方方
松松松
辻辻辻
尾尾尾
串串串

山を深く愛する著者がすぐれた科学の眼で掘りさげた岳界待望の山の科学教養書！ 本書の出現は科学的に山を理解しようとする岳人の間に、いまや大きな反響をまきおこしている。(写真110枚・函入布クロス上製650円)

劔岳

解説 登攀ルート
高須茂・高瀬具康 共著

重厚な装幀・堅牢な製本・そして無駄のない客観的な解説(上田哲蔵氏)指示の的確(渡辺多蔵氏) 劔岳への情熱の結晶(藤木九三氏) 初心者にもベテランにも向く至れり尽せりの内容(古川純一氏) この「劔岳」のような本が統々出るようにならなければ日本の登山界はいまだしてしょう。(深田久弥氏)

東京都中央区築地1-6 築地書館
発行 東京 19057

ら日本の登山界に新しいテーマを提出していた。あらゆる意味において登山界の第一線をリードしていたともいえるであろう。それだけの輝いた内容を持つていたものである。だから私は今度の登高行もそのつもりで非常な期待をもつて読みはじめたのである。しかしその期待が余りにも大きかったためかも知れないが、どうやら裏切られたというのがいつわりのない私の読後感であった。もちろんこれは戦後の慶大の学生諸君の動きについて全くの白紙であった私の不勉強のせいなのだが……

慶大のお家芸ともいえる雪洞の報告にしても、すでに白水社の山岳講座に発表されたものと全く内容が同一であるのも物足りなかつた。これもまた私の一人合点かも知れないのだが学生諸君の行動はすべて、あまりにも過去の偉大な伝統を意識しすぎ、それにしばられて行動にはつらさを欠いているようにも見受けられた。二十八年三月の剣から西穂、同年十二月の針の木から前穂縦走の成功とようやくもあがつてきたところで富士、北穂とアクシデントを惹起し再びふり出しに戻らざるを得なくなつたのはまことに不運というよりはかにはいいあらわせない。これもまた私一人の好みによるのだが、今度の登高行で一番面白く読んだのは鹿子木博士の遺稿であつた。これは日本の登山史上からみても一つの貴重な文献となつてゐる。大変失礼きわまらないことばかり書き並べてしまつたが、とにかくこれだけ堂々たる部報が出せるというのも慶大ならではの

ことであらう。(山崎)

昭和三十三年三月三十一日慶応義塾体育会山岳部発行、三三〇頁、写真十葉、頒価五百円



会員通信

あさくさ岳

藤島 敏男

今冬はスキートの流行シヨケツをきわめ、スキー地と名のつく所は海水浴場か遊園地が雪の上に引越したとおもえば間違いないような始末となり、騒音不感症でも難治平気症でもない僕は到底出かける気にならない。それに猫の額のようない狭いところを、リフトとやらで上つたり下つたり、井戸のツルベみたない真似をしたつて始まるわけでもない、オリンピック出場するレイスの選手まがいのスキーをはい、ブーツかつたりブーツかられたり、たかが練習場で足を折つたりするのを観たいとも思わないので、リフト族や日帰り族の殺到しない静かな雪の山、それも衣食住から家財道具まで含む大荷物を担がらないですすむところはないものだろうかと、考えた挙句一九二五

年五月以来御無沙汰している、守門、浅草の二山に登ることにした。三月廿三日午後只見線大白川駅にスキーをたずさえて下車した。は、吾々一行(野口末延、伊倉剛三、石坂昭二郎、その他三名)の外には誰もいなかった。五味沢には三十二年前にはなかつた営林署の事業所ができたが、民家は依然として浅井家ただ一軒が、深い雪に埋もれていのである。翌日はムシナ沢をかなり上まで登つたが、濃霧と風に阻まれて引返して、廿五日前夜来の新雪を踏んで、美しい樹氷にみとれながら沢から尾根へ、宿を出てから四時間半で浅草岳の頂を踏んだ。一面の霧だつたが小憩する内に予言的中、一天俄かにかき晴れて眩しい春光が蒼空からさんさんとふりそそぐ好日となつた。頂上から北へ坦々たる大道のような早坂を滑降、やがてブナの林の中を右折へ。振返つて仰いだ浅草岳はスイス・エンガダインのピッツ・パリュを、僕に思い出させるような、おおらかな姿を出していた。廿六日猛吹雪、下クロヒメ沢を溯つて駒の神に登り、守門の稜線を西へトラヴァースして入広瀬駅へ出る積りで出発したが、雪、霧、風で視界をさえぎられ、まるで盲目飛行のようなので、他日を期して往路を引返し、大白川駅に出た。三泊四日の短かい旅だったが、雪深い山谷にスキーを駆つた楽しさは永く僕の忘れ得ぬものとなるであらう。

蔵王遭難に一言

岩永 健二

今冬は少々季節がおくれている

ようでしたが、二月に入つてから気温も下り雪が降り続き、三月に入つても殆んど毎日雪降りです。蔵王なども近年にはない積雪です。この分なら四月一杯は滑れそうですが、しかし雪に誘われて登山するスキーヤーも増加する一方で、それに伴つて遭難も跡を絶たず、山形側蔵王で三件、宮城側で一件発生しております。山形の方には昨年遭難対策委員会が出来ましたので、山形側の場合には専ら向う委せです。こちらで出動したのは一回だけですが、数日前のことです。最近山形の知識も大分一般に判つて来たようですが、死亡者は非常に減り、今度の宮城側の場合も雪洞二泊、避難小屋二泊の後自力で下山し岳連関係でも大いに驚いている次第です。今の所四回遭難による死者は一名(東京の人)で未発見です。しかし大半のスキーヤーは我々が見ても「よくこんな装備で」と思われる人達です。たまたま遭難にでもあえば悪いのはリーダーだけで、他の人は只引ずり込まれたのだという方が非常に多く、特に東京方面には自分の山岳経験は棚上げしてリーダー委せで蔵王に来る人が多く、冬山の認識をもっと少し深めて頂きたいと思ひます。蔵王で遭難する人の大多数はスキー技術についてはベテラン級が多いのです。スキー技術と登山技術(特に冬山の気象や装備)は全く別のもので特に地形上天候の悪化の甚だし蔵王については東京方面の方も少し勉強して来て頂くと共に、毎年各地で発生する山岳遭難事故にはもう少し関心と研究心を持つてもらいたいものと思ひます。

います。

J・A・C・の何かの会合の折もし出来ますなら東京方面のスキーヤー諸氏に蔵王の危険性や或いは冬山の知識を或る程度知つて頂くような方法を研究して頂きたいと思ひます。但しこれはいわゆる観光宣伝と対立することになるかも知れません。「リフト新設、道標完備」「蔵王は招く」或は「樹氷の蔵王へ、指導標、スキー場完備」というような文句を見れば、誰でも簡単に安全に樹氷見物が出来そうですが、晴天の場合にはとにかく天候悪化の時には道標の全然見えなくなるのが普通です。たかが千七八百メートルですが、蔵王の冬山は日本アルプス級だと思つておろ度というところも珍らしいことではありません。

宮城県遭難対策でも長年パンフレットやポスターを配布し、またシーズン前には必ず一般市民のための冬山教養講座などを開き、やつとこの一、二年一般のスキーヤーにも冬山というものについて幾分理解されて来たように思ひます。今回の遭難者の場合も雪洞の掘り方は去年の講座で知つたこととです。今まで蔵王の遭難は地元の人でしたが、昨年のクラーク氏以来東京の人が多くなつて来ましたが、そろそろ私達の啓蒙運動も限度に達したようですので何分よろしくお願いを致します。

り)

新旧役員交歓会 六月十二日午後六時から本会ルームで開催した。

会務報告

昭和卅一年度収支決算

(32・3・31)

収入ノ部 (単位円)	予算金額	決算金額
科目		
經常収入	70,500	96,240
入会金	4,000	4,000
東京会費	24,000	24,000
地方会費	33,500	33,500
旧会費	10,000	11,780
次年度会費	1,000	1,000
事業収益	5,000	28,800
会報広告	4,000	3,000
山岳	1,000	3,000
山日記勘定	10,000	10,000
山岳売上	2,000	2,800
山日記手数料	40,000	40,000
山岳売上	1,000	1,600
貸室料	1,000	1,000
地図売上	1,000	1,000
遭難対策基金	1,000	1,000
図書基金	1,000	1,000
雑収入	10,000	6,800
計	1,340,000	1,351,330
支出ノ部 (単位円)	予算金額	決算金額
科目		
事務費	20,000	34,000
事務給手当	10,000	13,900
文具費	2,000	2,000
印刷費	10,000	11,700
通信費	10,000	11,700
交通費	10,000	11,700
雑費	10,000	11,700
管理費	10,000	11,700
諸税	6,000	7,100
火災保険料	8,000	7,400
修繕管理費	10,000	8,600
光熱費	25,000	36,900

電話料 三六、五三
消耗品費 三、〇〇〇
減価償却費 一八、九五
雑費 三、〇〇〇
事業費 七三、四〇〇
会議費 五、〇〇〇
小集金費 一、〇〇〇
集金費 五、〇〇〇
山日記編集 一〇〇、〇〇〇
会報編集 一四〇、〇〇〇
山岳編集 四七、〇〇〇
組合費 一、〇〇〇
指導費 六、〇〇〇
調査研究費 三、〇〇〇
渉外費 一、〇〇〇
備品費 一、〇〇〇
図書整備費 五、〇〇〇
支部還付金 八、〇〇〇
基金 三、〇〇〇
雑費 三、〇〇〇
計 一、三五四、〇〇〇
剰余金 三〇、五三三
合計 一、三五四、〇〇〇

貸借対照表

(32・3・31)

資産ノ部 (単位円)	借方 (単位円)
建物	七六一、三八五
什器備品	二七六、六〇〇
図書	六四四、〇〇〇
有価証券	九〇、〇〇〇
銀行預金	二一五、五六二
振替預金	〇、九六〇
未収入金	一、二八、六八〇
現金	二〇、八一七
合計	二、五〇一、二七八
負債ノ部 (単位円)	貸方 (単位円)
基金	一、三九七、一七〇
積立金	六三〇、〇〇〇
引当金	二一、〇〇〇
遭難対策基金	二一、〇〇〇

図書基金 五、四五〇
未払金 一、〇〇〇
計 二、一九六、一六五
当期剰余金 三〇、五、一一三
合計 二、五〇一、二七八

財産目録は右貸借対照表と同じ
社団法人日本山岳会昭和卅一年
度収支勘定決算書、同貸借対照表
及び財産目録につき監査致しまし
たところ正確なることを認るす
昭和三十三年三月三十一日
会計監事 石原 憲治
同 諸岡 一夫

四月理事会 十七日(水)

場所 本会図書館
出席者 別宮会長、松方副会長
理事 徳久、折井、松丸、羽鳥、
金坂、千谷、太田、評議員 神谷、
岩永、沼井
△議事
一、会員総会の準備
二、月例会計報告(太田)
通常会員総会は四月二十日午後二
時から御茶の水日本体育協会議
室で開催、別宮会長の三十一年度
事業報告、太田理事の会計報告、
新潟(藤島) 静岡(山本) 東京(野
田) 各支部および仙台地方の状況
(岩永) 各報告について、本年
度理事として別宮副会長、日高信六
郎、松方三郎、小原勝郎、折井健
一、山崎安治、太田敬、辰沼広吉
金坂一郎、村木庸益、松丸秀夫、
大塚博美、徳久球雄、石坂昭二
羽鳥肇、田島汎、野田三郎の十七
名を本年度理事に選任、三十一年
度任期満了となった会長、副会
長は別宮、日高、松方三氏の留任
を決定した。

ら明大の白馬鑑遭難報告があつて
散会、ルームで静岡鉄道管理局撮
影の大無間、小無間、赤石岳その
他の映画が映写された。

五月理事会 八日(水)

場所 本会図書館
出席者 別宮会長、松方副会長
理事 折井、辰沼、小原、太田、
金坂、山崎、松丸、大塚、徳久
石坂、村木、評議員 渡辺、沼井
岩永、成瀬
△議事並に報告
一、理事事務分担をつぎの通り
決定。

辰沼(指導、研究) 太田(経理、
支部、財務) 折井(総務、国体)
金坂(渉外) 山崎(編集、山岳
会報) 松丸(図書、集会) 石坂
(指導、研究) 村木(指導、研
究、国体) 徳久(編集、山日記、
記録) 羽鳥(指導、研究、経理)
大塚(指導、研究) 田島(編集
・山日記) 野田(総務)

一、常務理事は左の六名に決定
折井、小原、辰沼、太田、山崎
金坂
一、国体委員会左の五名に依頼
小原、渡辺、折井、村木、牧野
一、会員名簿の件、原稿出来上
り現在誤りを訂正中である。

一、黒部峡谷映画の件、関西電
力が日映新社に制作させている
黒部ダムの宣伝映画に対して山
岳会の推薦を申入れて来たが推
薦はこわった。

一、山日記の件、編集委員を徳
久、松丸、春日、高島、加藤、
坂本、渡辺、田島の八名に依頼
五月役員総会 廿二日(水)

場所 本会図書室

出席者 松方副会長、理事 太田
折井、金坂、石坂、村木、山崎
松丸、評議員 沼井、岩永、村井
木津富山支部長
評議員は三十二年度で任期満了
となつたので左の十八氏を新た
に評議員に推薦

三田、早川、藤木、西堀、今西
錦、入沢、辻、中田勇、島田、
伊藤秀、篠田、成瀬、渡辺、竹
節、望月、交野、藤井
関西支部長 篠田軍治氏が
このほど辞任、津田周二氏が関西
支部長に就任した。

図書基金寄附 日本勧業銀行よ
り金五千元也図書基金として寄贈
された。

昭和三十三年五月廿五日発行

東京 都千代田 区

神田 駿河臺四ノ六

社団法人 日本山岳会

編集者 山崎 安治

頒価二十円

東京 都港区赤坂五番地

印刷所 株式会社 技報堂